

受賞者手記目次

第63回社会貢献者表彰 受賞者30組(敬称略)

NPO法人 エンパワメント輝き	30
一般社団法人 若者サポートnanairo	32
NPO法人 CROP.-MINORI	34
カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター～	36
一般社団法人 つなぐ子ども未来	38
NPO法人 ブエンカミーノ	40
NPO法人 青少年の居場所 Kiitos	42
株式会社 ローランズ	44
NPO法人 スキマサポートセンター	46
NPO法人 アイキャン	48
NPO法人 無国籍ネットワーク	50
認定NPO法人 レスキューストックヤード	52
NPO法人 ぴあらいふ	54
NPO法人 なでしこの会	56
NPO法人 ハート in ハートなんぐん市場	58
NPO法人 RAFIQ 難民との共生ネットワーク	60
医療法人名南会 名南病院	62
一般社団法人 日本フォレンジックヒューマンケアセンター	64
NPO法人 そらいろプロジェクト京都	66

NPO法人 プチユナイテッドアスリートクラブ	68
NPO法人 アスイク	70
公益社団法人 あおもり被害者支援センター.....	72
NPO法人 AlonAlon	74
認定NPO法人 NEXTEP	76
NPO法人 JFCネットワーク	78
NPO法人 レジリエンス	80
NPO法人 無戸籍の人を支援する会	82
酒井 和枝.....	84
一般社団法人 レガートおおた.....	86
男の介護教室.....	88

対象となる功績内容

- 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
 - 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
 - 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
 - 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
 - 家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績
- その他の功績
-

NPO法人 エンパワメント輝き



理事長

大光 テイ子

岩手県

2018年に大光テイ子さんが設立し、ひきこもりの人たちの支援を中心に岩手県洋野町で活動しているNPO法人。ひきこもりは背景に複数の問題があることが多く、家族への支援も含め、包括的に伴走型の支援を行っている。洋野町からの委託を受け、個別相談や家庭訪問を行い、役場に勤務していたころの人脈と経験を生かして、問題を抱える人と各支援先とを直接つなぐ役割を担っている。また親戚などへの支援にも繋げたり、ひきこもりの家族会や当事者が気軽に立ち寄れるカフェの提供など、様々な方法で一人も置き去りにせず、それぞれのゴールに向けて自分らしい自立ができるよう支援している。行政との連携と協働で取り組むことで、支援した人の約70%が治療、経済的支援、就労、進学等により変化し、社会復帰への一歩を踏み出すなど成果を上げている。大光さんは洋野町役場を退職後、地域包括支援センターで保健師として勤務していた際、20年以上引きこもっている50代の息子と暮らす高齢夫婦の支援に携わった。他にもこのような人たちがいるのではないかと洋野町が民生委員の協力で行った調査の結果、精神疾患やひきこもりの問題を抱える70名を超える人たちの実態が判明。そのうち50名がひきこもり状態の人たちだった。大光さんはその50名を地道に訪問し続け、地域包括支援センターを定年後もひきこもり・精神疾患・生活困窮・要介護の人たちを支援するためNPO法人として活動することとし現在に至る。後継者探しを継続中。

この度は、社会貢献者表彰という大変名誉ある賞をいただきまして心より感謝申し上げます。

特定非営利活動法人エンパワメント輝きは、平成30年に設立し、ひきこもり者の支援や認知症者の支援、介護予防など主に町から委託を受けて活動しています。その他に知的、精神、発達障がい者への支援や生活困窮者への支援も独自に行なっています。包括的支援をするためには関連することが多いからです。

私はひきこもり者の支援に関わるようになって14年になりますが、初めて支援した家庭が8050問題と住まいの問題など複合的な課題を抱えていました。両親の介護支援とひきこもりの子どもの支援、住宅改修など包括的に支援いたしました。当時はひとり暮らしのひきこもり者は1人だけでしたが現在は12人に増えております。生活保護や障害年金の申請などの支援や、治療が必要な方への受診に同行しています。

高齢の親が多いことから早期支援が喫緊の課題となっています。親亡き後も生活できるよう経済面での支援や就労支援を行っております。当初支援はしないと拒否した方々も高齢になるにつれ、支援して欲しいと希望するようになりました。就労できた方や自立した生活ができるようになった方など、一人ひとりのゴールは違いますが自己肯定感を高め、生きていてよかったと思える人生を送ってほしいと願っております。

今までひきこもり支援を継続できたのは、精神科医であり中央大学教授の山科満先生のご指導ご協力の賜物です。東日本大震災後から久慈地区及び洋野町のひきこもり

の家庭訪問や相談、講演会などにご尽力いただきました。心より感謝申し上げます。

昨年、地域包括支援センターが10年ぶりにひきこもり実態調査を実施したところ、新たに100人くらいいることが分かりました。関係機関と連携し一人ひとりに寄り添いながら支援して参りたいと思います。支援が長期にわたると思いますが、この受賞を機に職員一同なお一層努力して参りますのでよろしくお願いいたします。この度は栄えある表彰を賜りまして誠にありがとうございました。



▲家庭訪問にいきます



▲当事者の居場所の様子



▲家族会の屋外活動（海浜公園の散歩）



▲地域での出前講座



▲家族会の様子



▲講演会後の家族会との交流会

一般社団法人 若者サポートnanairo



代表理事

増田 真由美

岐阜県

2016年から岐阜県山県市で「誰もが自分の色で輝けるように」と、生きづらさを抱えた主に精神に障がいのある人たちが、地域で安心して暮らしていけるように活動している。利用者には、親の虐待や家庭内不和、仕事の悩みなどで、鬱の発症、自傷行為や薬物依存の人、発達障がいのある人がいる。共同生活における日常生活のサポート、生活や就労についての相談にも対応するグループホームをはじめ、自立度に合わせたアパート型サテライト運営、就労継続支援B型、生活訓練の多機能型事業所の運営、福祉を利用する際に必要な計画相談支援、生活困窮者の就労訓練、準備支援、代表理事の増田真由美さんが保護司でもあることから、触法者の住居確保や自立支援、利用者の家探し、入居手続き、入居中の相談対応等、一人一人のお困りごとにきめ細かく支援できる体制を整えている。2024年に、地域の病院と提携し、精神科の訪問看護を365日24時間体制でスタートした。対象は岐阜市、山県市の精神科医の診断書がある子ども、大人。病状の管理から正しい日常生活を送るために寄り添う看護で、社会的孤立の防止と家族支援を行う。山県市で唯一精神障がいの人に寄り添う団体というだけでなく、スタッフのキャリアアップ支援にも力を入れ、精神保健福祉士の資格にかかる学費を全額支援し、団体の持続的成長と信頼にも寄与している。

この度は、第63回社会貢献者表彰という大変栄誉ある賞を賜り、誠に有難うございます。岐阜県山県市という人口約2万5,000人の自然豊かな場所で、私たちは2016年4月に法人を立ち上げました。開設から10年という節目に、当法人の活動に目を向け、このような機会を与えてくださった貴財団の皆様へ、心より感謝申し上げます。

一般社団法人若者サポートnanairoを開設した経緯には、恵まれない家庭環境や精神疾患などにより、生きづらさを抱える若者たちが、社会へと踏み出すとき、あるいは社会に出てからも様々な困難に直面しているという現実がありました。「誰もが自分らしい色で輝けるように」との目標を掲げ、同じ思いを持つ大人たちが集まり、見守り、サポートを続けて参りました。

開設当初は、私たちのような無名の団体が地域に受け入れられる事は簡単ではありませんでしたが、少しずつ共感や理解、応援して下さる方が増えていきました。nanairoのスタッフをはじめ、日頃からご支援くださっている皆様のお力添えにより、今回このような栄誉ある表彰をいただくに至りました。改めまして深く感謝申し上げます。

立ち上げ当初には、発達障害のある女性が事件を起こしたことをきっかけに、地域での事業所開設に反対の声が上がったこともありました。安心して安全に暮らしている方々にとって、精神的な課題を抱える人たちの居場所が近くにできることに不安を感じるのは、当然のことだと受け止めました。しかしながら、精神に課題を抱える方も地域で安心して暮らせる場所を作り、地域を安全な場所にしたいという思いから、地域の方々と少しずつ信頼関係を築いてまいりました。この10年で、その願いが少しずつ形になってきたように思います。

また、私たちのような福祉の力だけでは、課題解決は難しく、医療・教育・行政・民間など、さまざまな分野の方々と連携・協力することの大切さを痛感してまいりました。それぞれの専門性を活かしながら連携することで、多くの困難を乗り越えるこ

とができたと思っております。

今後は、時代の流れに応じて柔軟に対応しながら、常に前向きに行動できる組織を目指して参ります。今回、他の受賞者の皆様と出会い、お話を伺えたことにより、新たな意欲と学びをいただきました。

この度の受賞は、「支援に見返りを求めない」ことをモットーとして活動してきた私たちスタッフ一人ひとりにとって、最高のご褒美となりました。この賞に恥じぬよう、今後も自分たちにできることを一つひとつ積み重ねてまいります。



▲入社式



▲正月の餅つき



▲畑作業



▲地域の草引き



▲プロを招いて音楽イベント



▲新事業所の竣工式

NPO法人 CROP.-MINORI



代表理事

中山 須美子

神奈川県

自身の経験から「心の内側から起こる問題は、薬を飲めば治るということではない」ことを、「ドルフィンスイム」を通じて実感した中山すみ子さん、この体験を家庭環境に恵まれなかった子どもたちに届けたいと、世界的にも珍しい野生のミナミハンドウイルカが120頭近く生息する東京都御蔵島で、児童養護施設の中高生の子どもたちに、ドルフィンスイムを体験してもらう活動を1997年からスタート。深く傷ついている子どもたちの心に癒しを与え、ありのままの自分を肯定する機会を届けるこの活動は、集めた寄付で行い、これまでのべ約600名の子どもたちが参加している。2011年から自然豊かな横須賀市秋谷でファミリーホームをスタートし、委託を受けた幼児を預かり、ホームを退所する18歳まで長期間家庭的な環境下で心豊かな生活を送れるように養育している。ドルフィンスイム、アートセラピー、成長とともに生い立ちや過ごした時間に向き合うライフストーリーワーク、米国のNVC（ノンバイオレントコミュニケーション）の手法を生活に取り入れ、自信、他信と、1人1人の生きる力を育てている。団体名CROP.-MINORIには、子どもたちに自分だけの実りを実らせてほしいという思いがこめられている。

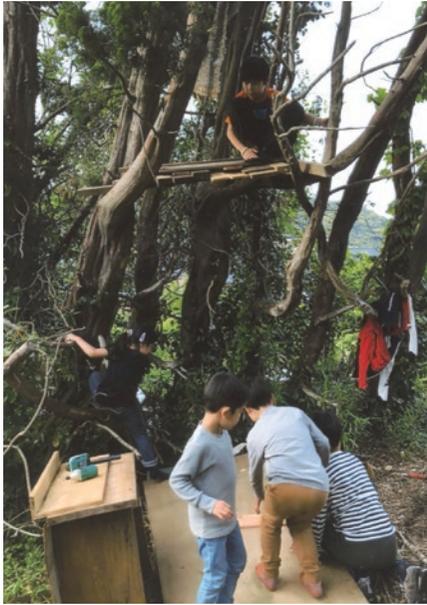
このたび、社会貢献支援財団より荣誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。日々の暮らしは、地域や行政、さまざまな連携機関の協力なくして成り立ちません。これまで支えてくださったすべての方に深く感謝いたします。

CROP.-MINORIは、困難な家庭環境で育った子どもたちに、自然体験や家庭的な養育を通して心の回復と成長の機会を提供してきました。1997年から、東京都御蔵島で野生のミナミハンドウイルカと泳ぐ「ドルフィンスイム」を実施し、深く傷ついた子どもたちに癒しと自己肯定のきっかけを作りたいと活動をスタートしました。この活動は寄付金によって運営され、これまで延べ約600名が参加してきました。野生のイルカや島民との交流を通じ、自然の優しさや厳しさ、目には見えないつながりを感じ、自信や他者への信頼を取り戻す場となっています。

2011年からは、海と山に囲まれた神奈川県横須賀市秋谷にファミリーホームを開設し、行政委託を受けた子どもたちを18歳まで長期にわたり養育しています家庭的な環境で、心豊かな生活を送れるよう支えています。生活の中には、ドルフィンスイムやアートセラピー、成長に応じたライフストーリーワークを取り入れ、自らの生い立ちや経験と向き合う機会を大切にしています。また、「ノンバイオレント・コミュニケーション（NVC）」の手法を日常に取り入れ、相手を尊重し合う関係性を築きながら、一人ひとりの「生きる力」を育てています。

日々一緒に食卓を囲み、笑い合い、時には衝突もしながら、家族として暮らしています。しかし、“本当の家族ではない”という現実が、あと少しの理解や支援の手前で立ちどかることもあります。子どもたちの暮らしを守るために必死で動く中で、その壁にぶつかる悔しさや孤独を感じることも少なくありません。団体名「CROP.-MINORI」

には、子どもたちが自分だけの「みのり」を育ててほしいという願いが込められており、活動全体を通じて、未来へ向かう彼らが自らの力で成長し、豊かな人生を歩めるよう支援していきたいと思っております。



▲お庭の木にツリーハウスを制作中



▲おいも、たくさんできるかな～



▲野生のミナミハンドウイルカと泳ぐ「ドルフィンスイム」



▲クロープハウス



▲クリスマスは、みんなで夕飯を準備してお祝いします



▲気分を変えてロウソクを灯し、夕飯をデッキスペースで

カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター～



共同代表

西本 マルドニア

神奈川県

神奈川県川崎市で移民女性のエンパワメントを目的に、夫やパートナーからのDV、差別の被害を受けた在日フィリピン人女性の当事者らが中心となり、2002年に設立。DV、シングルマザー、子どもの問題など、解決にむけて互いに助け合いながら孤立せずに社会で暮らしていただけるように支援する。カラカサンとはフィリピンのタガログ語で「力」を意味する。活動内容は主に相談事業、就労、食料支援、パスポートや在留資格に関して行政への申請、医療機関への同行支援、母子、高齢女性の家庭訪問のほか、DV被害による精神の回復と自立に向けてのセミナー、ワークショップの開催である。季節のイベントや、旅行などのレクリエーションも実施し、事務所は居場所として、移住女性同士で夕食を囲み、コミュニティづくりも日々行う。これまで延べ1,000人以上をサポートし、団体登録メンバーは100人を超える。日本国内の外国人が対象外だった「DV防止法」に対し、移住女性保護の観点を訴え、政策提言を続け、2004年の「改正DV防止法」では、日本国内の外国人も対象となるなど法改正にも貢献した。80年代来日ブームから40年、高齢化するフィリピン女性の今後と孤立防止のため自分たちに合ったセンターの立ち上げを視野に入れ、自分たちの力によって日本で安心して暮らせるよう取り組んでいる。

(推薦者：公益財団法人 かわさき市民活動センター)

この度、私たちカラカサンの女性一同が、「社会貢献者表彰」を賜りましたこと、大変光栄に存じます。移住女性と多文化の子どもたちに寄り添って22年以上を歩んできた今、改めて私たちの活動の意味を実感しております。私たちと共にいる女性たちが取り戻した力をより育み、これから私たちの元へ来る人々とエンパワメントを分かち合い続けることの重要性を深く感じています。心より感謝申し上げます。

2002年、私たちが活動を始めた当初を振り返ると、当時は多くの移住女性（主にフィリピン人）が、同年に閉鎖となった前身の移住者相談オフィスを訪れていました。彼女たちは厳しい状況にさらされ、弱り果てていました。人身取引や搾取、あるいは配偶者からの暴力の被害者であった人もいました。また、継父や不良グループのメンバーから性的虐待を受けた若い女性たちとも出会いました。困惑し、落ち込み、人間としての尊厳や価値を奪われた彼女たちを目の当たりにしたスタッフや被害経験を持つ女性ボランティアたちは、移住女性たちが回復し、本来の力を取り戻すための支援センターの必要性を強く感じたのです。

こうして生まれたのが「カラカサン」です。この言葉はタガログ語で「力」を意味します。人は誰しも生まれながらに内に力を宿しており、移住女性たちも搾取や虐待によってその力が弱まったとしても、決して消え去ることはありません。カラカサンは、特に移住女性が尊厳をもって平等に行動できる社会を思い描いています。力を取り戻した彼女たちがさらに他の人を力づけ、癒しと自己変革、社会や世界全体の変容へと歩みを進める。その姿に、私たちは移住女性が日本社会に積極的に貢献する姿を見たい。

トラウマや抑うつを乗り越えるエンパワメントは、移住女性の母親たちだけでなく、直接・間接的に虐待を経験してきた多文化の子どもたちにとっても大切です。私たちがケアしてきた子どもたちは、今では母親から自立し、自分の人生を歩む若者となり

ました。彼らにとってカラカサンは、困難に直面したときにいつでも帰ってこられる場所であり続けています。

現在、カラカサンには移住女性によるコミュニティがあり、スタッフと共に特別なニーズを抱える女性たちに寄り添っています。また、心身の滋養や癒し、そして生命力を育む行動を目的とした多様なプログラムを通じて互いをエンパワーしています。こうして私たちは高齢期に近づく自分たちの健康を守りながら、違いを超えた仲間やネットワークと体験を分かち合い、社会のすべての人が健やかであることを願っています。

改めて、この表彰を主催してくださった皆さまに心から感謝申し上げます。また、私たちが推薦してくださったかわさき市民活動センターの皆さまにも深く御礼を申し上げます。



▲あるこうよむらさきロード



▲サマーキャンプ



▲シェルターネットシンポジウム



▲ワークショップ



▲演劇ワークショップ



▲反貧困ネットワーク集会

一般社団法人 つなぐ子ども未来

愛知県



代表理事

安藤 綾乃

子どもを中心に誰もが取り残されない持続可能な地域社会をつくることを目的に、居場所の運営、非対面で24時間受け取り可能な冷蔵庫での食料無料配布と、より困難な家庭や子どもを個別支援するためイベント開催を行っている団体。代表理事の安藤綾乃さんは、2017年から、名古屋市昭和区内（11学区）の寺社やコミュニティセンターで巡回型子ども食堂をスタート。2019年に「つなぐ子ども未来」として一般社団法人化。巡回型子ども食堂で家庭が抱える様々な問題を知るにつれ、大変な子どもたちに常設の第3の居場所の提供をしようと、2020年に常設の「つなぐハウス」を開所。月・火・木・金・土に開催される食堂、放課後のたまり場、シニアの憩いの場、未就園児親子のくつろぐ場として様々な機能をもつ。さらに高齢者世帯、ひとり親家庭の子育て応援として夕食弁当を週2回を届ける。2022年から 無人の公共冷蔵庫「みんなのれいぞうこ」を設置し食材支援を開始。LINE登録して申し込んだ人の中から、当選した人が24時間以内に食材を非対面でピックアップできる。現在8か所まで設置され、食堂の利用に抵抗がある人、様々な事情で食料を取りに行けない家庭にリーチしている。つなぐハウスを拠点に居場所支援とみんなのれいぞうこのLINE登録者800名のニーズを調査、学生服、おせちやクリスマスケーキを送る等の企画を展開中。子どもとその家庭を地域で支える役割を実現している。

この度は社会貢献者表彰式典において、大変名誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。ご推薦くださった方々や選考委員の皆様、そして日頃から活動を支援くださる多くのみなさまのお力添えによって、このようなかたちで評価をいただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

私たちのように子ども食堂を基盤とした活動は全国各地に存在しています。その中で当法人を選んでいただけたことはまさに信じ難く、また、私たちの運営は決して大規模ではなく脆弱で地道なものです。それでも光を当てていただけたことは、法人として一定の社会的な認知を得られた証といえるのではないかと、大きな励みとなりました。

今回、一緒に受賞されたみなさまの多くは長年にわたって活動を続けてこられた方々であり、私たちのように活動歴が10年未満の団体は多くありません。その意味でも、諸先輩方と並び一定の評価をいただけたことは、身の引き締まる思いでございます。

私たちは「第3の居場所」という、まだ社会に十分認知されていない概念をもとに、常設の居場所をつくってきました。月1回の子ども食堂では子どもが抱える課題に十分触れることが難しく、また親が抱える子育てや生活の苦悩に寄り添うことも容易ではありません。地域の高齢者が抱える課題についても、お互い様の善意で解決したいと願いながら活動を重ねてきました。しかし、社会制度に位置付けられない取り組みや、制度をまたぐ事業は、行政からの理解や助成金・補助金の対象から外れるなど、長らく社会的な壁に直面してきました。それでも近年になり、ようやく私たちが行っている「社会課題を制度を越えて横断的に捉える事業」が認められるようになってきたと感じています。

新型コロナのはじまりとともに立ち上げた常設の居場所の活動を契機として、「子ども食堂」だけではなく、利用者が抱える困難に応じて多様な事業を展開することにな

りました。『居場所』での「待つ支援」にとどまらず、『アウトリーチ支援』としてお弁当を通じた見守りや関係づくり、非対面型の食料支援「みんなのれいぞうこ」による安心の提供など、支援のかたちを柔軟に変化させています。クリスマスケーキやおせちの配布、就学支援金の給付なども「制度にはないけれど社会が応援してくれる」という経験を子どもや家庭に届けることを大切にしてきました。こうした活動が、制度の隙間を埋め、人としての豊かさを育み、その豊かさを次の世代へとつないでいくと信じています。

さらに、LINEチャットによる相談支援や同行支援、一時宿泊シェルターの運営など、社会に孤立する若者のニーズに応える取り組みも展開しています。常に制度の狭間にある声に耳を傾け、必要な支援を柔軟に実施していくことこそ、私たちの役割だと考えています。

私たちは今年度、現在の居場所「つなぐハウス」を増築し、多機能な子ども・家庭向け福祉事業として運営を進めてまいります。しかし、多額の建築費用に対して、持続的な運営資金となる行政委託などの確定が得られず、また既存の社会福祉事業のいずれかに明確に該当しないため、大型の建築補助金を受けることもできませんでした。

それでも、年間10,000人を越える子どもや地域、そして社会を支える活動は、これまでも、そしてこれからも続いていきます。今回の受賞を通じて、私たちの事業は「社会の仕組みは後からついてくる」という信念のもと、パイオニアとしての役割を担っているのだと確信を得ることができました。行政にすぐに認められなくとも、やがて社会が追いつき、必要な仕組みとして認知されていく。私たちはそう信じ、この計画を実現してまいります。

なお、副賞としていただいたご支援は、この増築の建築資金として大切に活用させていただきます。これからも、子どもと地域と一緒に社会課題に向き合い、解決へと歩みを進めるための取り組みを続けてまいります。今後とも温かいご支援を賜ることができますれば、大変幸いです。



▲公共冷蔵庫 みんなのれいぞうこの最新版 タッチパネル式



◀サンタさんが遊びにきた様子



▲子育て弁当あ高齢者のための支援弁当



▼みんなのれいぞうこの食品をパッキングしているところ

NPO法人 ブエンカミーノ



代表
吉川 望

広島県

「孤立の防止」を目的に、広島の最北端・安佐北区で、農業を通じた若者支援と地域共生を活動の柱に、吉川望さんが2011年に設立したNPO法人。ひきこもり、不登校、発達障害、精神障害、生きづらさを抱えた若者たちに、住まいを提供して農作業をしながら暮らしをともにし、心と体を整え自立を後押ししてきた。キャリアブレイクしたい人、適応障害などで休職中の社会人、就活で悩む大学生、人間関係に不安を抱えている人に、合宿型農業ワークキャンプ（年5回開催）、短期間の共同生活、農業スタッフとして就労機会の提供も行っている。こうした経緯から、人がリカバリーできるチャンスは「孤立解消」と考え、2018年から徐々に「緩くつながることの大切さ」を重視。2022年には古民家を改装し、地域に開かれた交流スペースOKAZAKIをオープン。子育て世代から地元の高齢者、いつでも誰でも集える場を設け、食堂も運営、農園で収穫した新鮮野菜を使ったランチも好評である。2024年には、不登校の子どもたちのためにフリースクールをかねた居場所をはじめ、17名が通っている。ブエンカミーノはスペイン語で「良い旅路」が意味。人生でつまづいた時にいつでも戻れる「港」を沢山つくることで、再出航できる機会を与えている。

この度、このような賞を頂きありがとうございました。

妻と授賞式に向かいましたが、長男を出産してから（子供4人）初めて、15年ぶり広島から東京へ二人だけの旅行となりました。

また帝国ホテルという日本最高のおもてなしを夫婦で受けさせていただき、言葉に例えようがないほどの幸福な気持ちで授賞式を迎えました。

妻と共にブエンカミーノを立ち上げ15年、色々なことがありましたが「こんなことがあるんだ」と、しみじみと二人で浸らせていただきました。

今後の展望は、今までずっとやって来た孤立の予防、解消、防止であることは変わりません。

しかし時代背景、社会情勢などで人の孤立は変化していきます。

コロナやネット、また過剰なプライバシーやコンプラ、人が人に包まれていく過程が非常に難しくなっていく昨今、そのような問題に適応しながら私たちに出来ることをさせて頂きたいと思っております。

そして今回授賞式で出会ったAlonAlonさんと連絡を取り9月初旬に視察に行かせてもらうことになりました。スキマサポートさんとも近いうちにお会いすることになっています。

このようなご縁、非常にありがたく今後も繋がらせて頂きたいと思えます。

私はなぜか人に恵まれて、運の良さだけで生きていると言っても過言ではありません。

出会いによって自分の人生の息を吹き返した実感があります。新しい深呼吸を覚えた実感があります。その時気づかなくても後々あの出会いが大きかったと気づいて、今の私がここに居る為に導かれてきたと実感しております。

振り返ると私の人生は不思議なほど何故か奇跡のように人に恵まれてきました。
孤立で苦しむ人たちにも、このような奇跡が訪れることを願い、これからもできることをやっていきたいと思っております。
この度は本当にありがとうございました。
今後ともよろしくお願いいたします。



▲子どもイベント“ハロウィン”集合写真



▲地域交流スペースオカザキのランチ風景



▲年に3回～5回開催するワークキャンプ



▲ワークキャンプで作業終了



▲収穫祭での収穫中



▲フリースクールの子どもたち川遊び

NPO法人 青少年の居場所 Kiitos



代表

白旗 眞生

東京都

2010年、青少年の居場所として、東京都調布市で白旗眞生さんが開設。白旗さんは調布市の青少年ステーションCAPS（キャプス）のカウンセラーを勤めていたが、家庭や学校で居場所が見出せず生きづらさを抱えたままにも関わらず、18歳でCAPSを利用できなくなる子どもたちを案じ、自身の退職の際に連絡先を渡してみた。すると思いがけず多くの連絡があったことから、居場所の必要性を痛感し、Kiitosの開設を決意した。現在、Kiitosは、金曜・日曜と第3月曜を除き、午前11時から子どもたちの帰宅まで扉を開いている。居場所の利用も、昼食・夕食も無料。約70名のボランティアスタッフが、事務作業から食事作り、清掃や送迎など、それぞれの役割を担って子どもたちを見守る。個別の学習支援も行ない、高卒認定や大学受験へ対応、合格を勝ち取る子どもたちが出ている。2023年8月には、20代30代の若者たちの自立を願い、「障害者生活訓練事業所Porta」を開設。Kiitosはこれからも、痛みを負った子どもたちの「止まり木」であり続けたい。少し疲れた羽を休めて、再び飛び立てるように。

青少年の居場所Kiitos——これまでの活動、今後の展望

青少年の居場所Kiitosは、家庭にも学校にも居場所を見つけられない子どもたちが安心して過ごせる場所を提供することを目的に、2010年に設立しました。

かつて、多くの家庭は大家族でした。仮に親が仕事の都合などで面倒を見ることができなくても他の家族が子どもたちの相手をしていました。しかし今は核家族が主流となり、親が子どもに愛情を注がないと、子どもたちは育児放棄の状態に置かれてしまいます。そうなると、彼らは自己肯定感をもてないまま保育園や幼稚園、学校に通うことになり、集団の中で孤立し、他者とのつながりを持ってなくなってしまいます。乳幼児期の愛情の欠落は、大きくなってもなかなか埋めることはできないほど深刻です。

Kiitosは、そのことを踏まえて、一人ひとりの子どもたちをありのままに受け入れるところから始めています。日々、キートスに通ううちに、徐々に安心感をもてるようになってきます。それを助けているのはまず食事です。腕自慢のボランティアの方々により、昼食と夕食を1日30食ほど、心を込め作ってもらい、無料提供しています。食材や必要経費は、団体や個人の寄付金で賄っています。

Kiitosの子どもたちは、美味しいご飯を皆で一緒に食べ、行事などを共に経験し、学習支援を受け、信頼できる大人に相談に乗ってもらうなどして、「育ちあい」「育ち直し」をしています。

子どもたち一人ひとりの自立に向けて、真摯に向き合い、誠実に支援してゆくことがKiitosの活動の目的となっています。子どもたちが少しでも内面を豊かにし、自己肯定感を持てるように、心身ともに元気に育ってくれればと願っています。

将来に向けて、本来はKiitosを必要とする子どもたちがいなくなることが理想ですが、今の社会の現状を見ると、しばらくは望めそうにありません。Kiitosが必要とされる限

り、本来の目的を達成すべく、今後も続けたいと決意しています。

そのためには、世代交代を考えなければなりません。今までKiitosの活動に加わってくださった多くの方々の意見を聞きながら、活動を継続し、さらに充実して行えるよう、若い方々の力に期待しているところです。



▲外観



▲食事



▲食事



▲行事



▲相談



▲相談

株式会社 ローランズ



代表取締役

福寿 満希

東京都

「みんなみんなみんな咲け」の願いを込めたスローガンを掲げ、障がいや難病、様々な困難と向き合うスタッフを多数雇用している花屋を運営。代表取締役の福寿満希さんは、2013年にフラワーギフトを扱う会社を設立。その後、障がい者の雇用を本格的に始め、カフェを併設する生花店を2017年東京原宿にオープン。次いで主にレンタルグリーンなどを扱う天王洲アイル店、東京都に認証されたソーシャルファームの晴海店、横須賀では花の栽培をするローランズファーム、グループホームのローランズハウスも運営している。現在、従業員100人のうち7割が障がい当事者。仕事を細分化し、その人の特性に合わせた仕事+チャレンジが必要な仕事を行うことができる。配属された部署で仕事や人間関係で支障が出ても、辞める選択の前に社内ジョブチェンジできるようにしている。またチームで仕事を行うことで、互いを思いやり、誰かができないことはチームのなかで補い合う。障がい者の継続的な雇用促進を目的に、日本初の試みとして2019年にウィズダイバーシティ有限責任事業組合を設立。中小企業が地域の障害福祉事業者と連携して、共同で障がい者を雇用する仕組みである。現在15社が参加し、この仕組みによって57人の障害者雇用を創出した。

私がローランズを始めた原点は、教育実習で訪問した特別支援学校で耳にした「ほとんどの子は働くことができません」という言葉でした。一方、子どもたちは将来なりたい仕事を目を輝かせながら話してくれました。「障害と向き合う子どもたちの働く夢を叶えたい」という思いが芽生え、子どもたちの夢の一つだった花を選び、23歳でローランズを創業しました。

しかし、道のりは平坦ではありませんでした。起業3年目でようやく事業が軌道にのり、障害者雇用をしたいと打ち明けたとき、当時の仲間から理解が得られず、スタッフ全員が離れていきました。さらに、新店舗候補の物件オーナーから障害者雇用について承諾のサインをもらえず、計画が白紙になったこともあります。福祉事業のイメージにもなっている「狭くて、暗くて、遠い」というイメージを一掃したい思いと「憧れの街で働く」が障害者の働く場の選択として広がってほしいという思いを諦めず、その後日本財団様の支援も頂きながら、ローランズは現在、原宿店・晴海フラッグ店・天王洲店とローランズファーム横須賀の4拠点へと広がりました。

今、ローランズでは約140名の従業員が働き、そのうち約7割が障害や難病と向き合っています。私たちは、作業工程を10工程ほどに細分化し、スタッフの得意を生かして工程ごとのプロフェッショナルを育成しています。その結果、スキルを積み上げ、福祉サポートを卒業して一般就職へつながったスタッフも輩出してきました（A型からの一般就職数は全国平均の5倍）。花を介して、スタッフが自信をもって社会とつながっていく姿は、私たちにとっても大きな喜びです。

一方で、社会全体を見渡すと、働ける年齢の障害者は全国で約356万人いるにもかかわらず、そのうちの約8割は未就労ともいわれています。ローランズの取引先には中小企業も多くいますが、「障害者雇用を諦めざるをえない」とよく聞きました。そこで

2019年には「ウィズダイバーシティ有限責任事業組合」を立ち上げ、中小企業と福祉事業所が連携して障害者を共同雇用する仕組みを構築しました。2025年7月現在、組合には日本最多の17企業が参加し、これまでに24名の新たな障害者雇用を創出することができました。しかし、この「組合」という仕組みがあることの認知度が低いことが課題でもあります。

今回「社会貢献者表彰」をいただいたことは、中小企業が障害者雇用を諦めずに推進していくための選択として、ウィズダイバーシティを知っていただける契機になり、改めて感謝いたします。

今回の受賞を励みに、これからも立ち止まることなく、「みんなみんなみんな咲け」が実現する社会に向けて挑戦してまいります。



▲ローランズファーム集合写真



▲花の収穫



▲花制作の様子



▲商品



▲花屋



▲カフェスタッフ

NPO法人 スキマサポートセンター



理事長

佐藤 仁孝

大阪府

日本では犯罪加害者家族への支援をする団体が少ない。加害者が逮捕された直後から加害者家族は多くの問題に直面し、疲弊し、日常生活を送れなくなり、一家離散に追い込まれる例は少なくない。犯罪加害者には出所後に家族の助けが必要だが、家族が崩壊すれば、加害者は戻る所を失って孤立し、再び犯罪に手を染めることにも繋がりがかねない。加害者の家族を支えることは間接的に再犯抑止につながる、そこに着目した臨床心理士の佐藤仁孝さんは2013年に任意団体として犯罪加害者家族への支援活動をスタートした。2015年には弁護士、臨床心理士、保護司等の専門家とともに法人化し現在の体制となった。犯罪加害者家族は住居、仕事、裁判、メディア等に対応しなければならず、精神的に追い込まれ、最悪では自死に至ることもある。佐藤さんたちは、逮捕直後から出所後まで変化していく問題に対して、適切な制度の紹介や医療機関に繋ぐ伴走型の相談事業を実施するとともに、加害者と加害者家族の就労支援事業、また同じ問題を持つ人同士が安心して語り合うことができるピアカウンセリング事業を大阪では月に一度、東京・名古屋・神戸では隔月で開催している。

非行・犯罪加害者の家族の支援を中心に活動を行っています。家や仕事を失った家族、施設に預けられたこども、自死を考えている家族など、加害者家族の惨状を目の前にして、放ったらかしにはできない、という想いが原動力です。なぜ誰も手を差し伸べないのか、と不思議に思いました。団体を立ち上げる時には、社会支援のスキマを埋めるのだ！という想いでスキマサポートセンターという名前をつけました。

家族の抱える問題は時間と共に目まぐるしく変わります。逮捕、裁判、受刑中、本人が社会復帰する段階と、4つに大別して考えていますが、「どうしたら良いのかわからない」という相談が多く寄せられます。相談が寄せられるタイミングもさまざまで、家族の状況や、家族内であっても考えや想いは同じではありません。ひとりひとりに向き合いながら、できることはなんだろうか、と共に悩みました。支援方法も手探りで、しかし、家族の窮地を何とかしなければならず、走り続けていました。

家族を支える理由としては二つあります。前述したように、一つは家族の悩み、苦しみを軽減し、家族の生活を立て直すこと。そしてもう一つは、家族と共に、加害者本人の再犯防止と自立を支えるというアプローチを実践しています。専門家がついた家族と、そうではない家族では、再犯率に差が出るように思います。そしてそれは、さらなる被害者を生まないことにつながると強く手応えを感じています。

振り返れば10年を超えて活動を続けていました。そのうちに臨床心理士・公認心理師を中心に、弁護士や社会福祉士、元学校長などの実務経験者といった専門家がおのずと集まってきてくれました。現場を知っているからこそ、加害者家族の支援の必要性を抱いていたのだと思います。理解ある多くの仲間に使われました。

苦しんでいる家族にこの支援を届けるために、全国的な展開が必要であると考えています。たらいまわしなどせず、ワンストップで解決できるよう、これまでの経験を広め、各地の支援者と連携していきたいと考えています。

社会貢献者表彰といった名誉をいただけるとは考えもしていませんでした。この活動は間違っていなかったのだと、自信を持ってました。ありがとうございました。



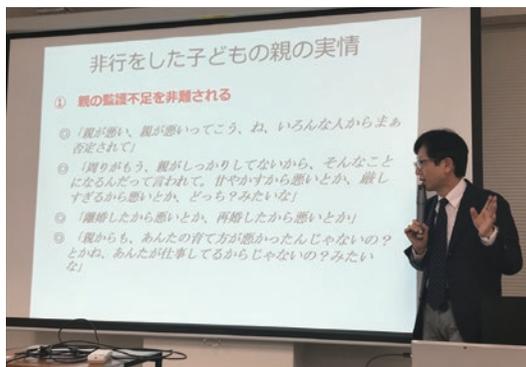
▲個別相談の様子



▲研修会の様子



▲刑務所より感謝状授賞



▲研修会の様子



▲研修会の様子



▲研修会の様子

NPO法人 アイキャン



代表理事

鈴木 真帆

フィリピン／愛知県

1994年からフィリピンを拠点に、路上で生活する子どもたちへの支援を開始。パヤタスごみ処分場周辺の生活向上支援や、ミンダナオ島の先住民・紛争地域での学校建設などに取り組み、2024年に30年目を迎えた。現在は児童養護施設「子どもの家」を運営するとともに、マニラ首都圏で家族がいるが路上で暮らす子どもへの見守りと路上教育を継続。また、路上の青少年が社会参加できるように、パン作りや営業・マーケティング研修などの技術訓練を行い、カフェ運営による就労機会も提供している。パヤタス地区での活動で培ったノウハウを活かし、2019年からはマニラ市トンド地区で低栄養の子どもに給食活動を実施。日本では海外研修の実施や講演などを通じ、国際理解教育を展開。2023年からは岐阜県美濃加茂市で多文化共生支援を開始。同市は10人に1人が外国人で、その多くがフィリピンにルーツを持っている。ワークショップの開催で交流の場を設けるとともに、フィリピンの文化的背景などに精通した職員が、生活相談をタガログ語でも受け付けている。また、家庭や学校に行き場がなく、夜に駅前で集まるフィリピンにルーツを持つ若者の居場所づくりをしており、そこで何気ない会話から生活の相談にのるとともに、若者の「やりたい」を応援する活動を行っている。

このたびは、第63回社会貢献者表彰において荣誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。アイキャンは昨年、設立から30周年を迎えましたが、新たな一步を踏み出した本年にこのような賞を頂けましたことは大変光栄であり、これまで共に歩んでくださった皆さまへの励みとなります。日頃より活動を支えてくださるご支援者の皆様、パートナー団体の方々、そしてこの度私どもの取り組みを推薦・表彰して下さったすべての方々に、改めて深く感謝申し上げます。

当団体の名称「アイキャン」には、一人ひとりの「できること (I CAN)」を持ち寄り、より良い社会をつくろうという思いが込められています。たとえ一人ができることは小さくても、みんなで力を合わせれば可能性は大きく広がる——その信念のもと活動を続けています。

アイキャンが活動するフィリピンには、現在も約37万人の子どもたちが路上で生活しているといわれています。日本のように戸籍制度が十分に整っていないため、公式に登録されていない子どもたちを含めると、その数はさらに多いと見られています。私たちは現地政府と連携し、路上で暮らしていた子どもを受け入れる児童養護施設を運営するとともに、教育支援や栄養改善事業などを展開してきました。施設では子どもたちがスタッフや寮母と共に暮らし、安心して生活できる環境を整えています。

近年、日本国内でも外国にルーツを持つ子どもたちが増え、その背景は多様化し、課題も複雑化しています。そこで私たちはフィリピンで培った経験を活かし、日本に暮らす子どもたちの支援活動にも取り組んでいます。

アイキャンの行動指針は「人々の『ために』ではなく、人々と『ともに』」(Not for the People, but with the People)です。子どもたち自身が自らの可能性や社会課題に気づき、その解決に主体的に取り組む力を育むことを大切にしています。

こうした活動の成果を単純に数値だけでは測れませんが、これからも地域社会や支援者の皆さまと共に、子どもたちが安心して暮らし、自分らしく生きられる社会の実現に向けて、着実に歩みを進めてまいります。今後とも温かく見守り、応援していただければ幸いです。



▲路上の子どもの声を聴く



▲児童養護施設「子どもの家」の子どもたち



▲路上の若者のパン作り研修



▲先住民地域で学用品提供



▲完成した学校で卒業式



▲給食活動